

『摩尼蔵院左学頭御房論義名目』の声点について

梅 崎 光

(1997年10月15日 受理)

On the Tone-marks of “Manizōin Sagakutō Gobō Rongi Myōmoku”

UMEZAKI Hikaru

論義の名目をあつめた文献としては『補忘記』がよく知られており、はやくから日本語アクセント史の資料として利用されてきた。それとともに、この文献が先行する同類の論義の名目類を利用していたらしいことについても従来から指摘されており、そうした文献のうちいくつかは、たとえば桜井茂治氏の『新義真言宗伝「補忘記」の国語学的研究』(1977, 桜楓社)や『中世京都アクセントの史的研究』(1984, 桜楓社)において資料として利用されている。また、名目集として編纂されたもの以外にも、論義の問答形式の本文に声点と節博士とを注した書の本文が石井行雄氏によって紹介^(注0)されるなど、『補忘記』以外の論義資料についてもその実態が明らかになりつつある。しかし「論議関係の資料ははてのつかないぐらい豊富」^(注1)との言もあり、今後も関連する資料の調査が継続されねばならない。最近では、高野山における表白のよみくせについて記録した文献が、金井英雄氏によって、いわゆる出合(イデアイ)研究の資料として紹介された^(注2)。

ここにとりあげる『摩尼蔵院左学頭御房論義名目』も、そうした論義における名目を記録した文献である。汲古書院刊『六地藏寺善本叢刊 第6巻 中世国語資料』(1985)におさめられ、ひろく公開されたが、この資料についてその国語史資料としての価値が論じられたことはあまりないようである。ひとつには、これがどういう学統につながる資料なのかが判然としないこと、また、24丁という言語量のすくなさなどがそうした状況の一因なのであろう。しかしながら、この文献には、声点をもってなされた掲出語句の声調表示の方法に特徴的な点があるようにおもわれるので、以下に調査結果の報告をする次第である。

複製本に付された築島裕氏の解題によると、この文献は、「摩尼蔵院左学頭御房、聖深院頼真の口説を中心に、記録した」論義の名目集である。それは、1丁オモテに「摩尼蔵院左学頭御房 聖深房頼真口説如之玄義同ルヲ加之／論義名目 文明十一年ヨリ同十四年至訖」とあって、また、14丁ウラに「離相丸丸 {スル／長亨元} ——玄同入門江益ノ時間十月晦日 義門多運 {玄同} ——長亨二正月十七日聞」とある記事によっている。そして、「この写本は、文明度に記されたものではなく、長亨度、又はそれ以後に記されたもの」とのことである。

このように、聖深房頼真と「玄」と称される人物との口説とが本資料の内容の中心をしめるので

あるが、これ以外の説についての言及も一部みえる。「04B02：終同<lh>厳云／04B04：短促<HT>厳聞本書可見」「04B01：法三<TH>空同／04A06：親疎<RH>シンソ・空義」^(注3)とある、「厳」「空」などがそれであるが、中心をなすものではない。

本資料がいずれの学統のものであるかについて、同氏解題では「高野山系列である可能性が大きい」とされる。摩尼蔵院および聖深院頼真については不明であるが、

一案としては、高野山の左学頭宝性院宥快(1345-1416)の説を承けたものとする解釈の可能性もあろうか。さすれば、宥快の師に頼真があったことが、宝寿院蔵六字護摩私記の奥書に見え、又「高野春秋」元応二年(1320)一二月条には頼真相達房と見える。そして「玄」

は同じ高野山宝性院に在つた玄海(1267-1347)の説と考へるのも窮余の一策かも知れない。という可能性を築島氏は示唆されている。

まず、この文献において使用されている声点の種類をみるに、平上去入の四声の別にくわえて、平声と入声とにそれぞれえ軽と重とを区別しており、さらにフ入声点も使用している。声点の形態は、圈点である。一部(21丁ウラ)に星点ももちいられているが、両者に質的な差はないようである。単点と双点で清濁を区別し、新濁を表示するとおもわれるタテならびの双点も、「06A04：偏習<Rp>」という1例に使用されている。

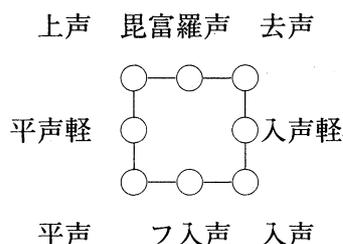
平声軽と入声軽の別に関しては、つぎのような点が注意される。

- a 01A03：階降<Lf>カル 02A03：所尺<LK>カル
b 01B06：詮要<FL> 04A01：機欲<HK>

まず、aのように、軽声点をさしたもののかわりに「カル」という語でさらに注記をほどこしたものがあつた。だが、すべての軽声についてこのような注記がついているわけではなく、bのように軽声点だけしかないものもある。これは軽声点と重声点との位置が曖昧になるばあいに配慮して「カル」という注記が付されているものとおもわれる。このうちいくつかはのちの加筆のようであるが、この注記の有無に特に有意義な差はないようである^(注4)。

さて、本稿で特に問題としたいのは、字音語にさされた声点のうち、軽声点の性格である。本資料の見出し語には、平声軽点がのべ118例、入声軽点がのべ28例存し、論義関係の資料のなかではかなり豊富な方なのである。

たとえば、『補忘記』下巻所載の点図にはつぎのように



とあつて、論義の世界において平声と入声にそれぞれ軽重を区別する伝承のあることをしめす。し

かし実際には、『補忘記』にも、たとえば平声軽点のさされた例は貞享版に5例、元禄版に9例しか出現しない。こうした軽声点出現数の相違はなにゆえ生じるのだろうか。

そもそも、『補忘記』をはじめとする論義関係の資料は、おおむね呉音がもちいられているのであるが、そうした呉音主体の文献において軽声点が登場することは一般にどういう意味をもつのだろうか。もともと呉音の声調体系に平声軽や入声軽という調類は存在しなかったのだが、話線的関係によってそうした声点のしめす調値（下降調や高平調）が登場することはあった。それを六声の体系によって把握した結果、平声軽点や入声軽点もちいられることになったわけであろう。そうした呉音における軽声については、沼本克明氏が調査された結果がある。

沼本氏は鎌倉時代から南北朝期にいたる法華経読誦音資料を調査された結果、「呉音においては、平声軽・入声軽としての軽声調は、単字声調としては存在せず連続上の声調変化の結果として出現するものである。就中、入声軽は入声字（入声重）が上声字または去声字に下接する場合、もしくは、上声字に上接する場合に出現し、毘比羅声の示す声調変化と同じく一種の和語アクセント化と考えてよい」^(注5)と結論づけておられる。そして、そうした環境にない位置に出現する入声軽については、「漢音系字音の混入等によると考えられる」^(注6)と主張されている。

法華経読誦音においては平声軽の例は「一切」という一語にかざられるものであったが、『補忘記』においては、「一切智智 < TFLL / LFLL > 切ノ字何ノ處ニテモ平声ノ軽也(2)」以外に「三辰 < FH / FL > 三ノ字平声ノ軽、日月星(44)」「金言(キンケン) < Fh / FL > 金ノ字平ノ軽、三井亦同(元54)」「当山 < Fl / HL > 或云当ノ字此時ハ軽也(元69)」^(注7)のように、それ以外の語にも出現している。これらの平声軽点はどういう理由でさされているのかは個々の事情によるのだろうが、音形から漢音であることが明白であり、かつ『長承本蒙求』のような漢音声調資料においても平声軽点がかざされている「金(言)」のような例をふくむことはたしかである。

このようなことから、本資料にみられる平声軽・入声軽出現の理由を考察するにあたって、上接字の声調といった軽声点の前後の環境、漢音の混入という視点からの検討をこころみたい。

まずは、本資料における軽声点の分布をみてみよう。次表は、標目となった漢語において平声軽点と入声軽点が登場する環境を上接字と下接字の声点（および付属語・サ変動詞であるか）で分類し、その数値（のべ数。カッコ内がことなり数）をしめしたものである。なお、以下では平声軽点・平声重点・上声点をF声点・L声点・H声点などと称することもある。

※平声軽 (F) 点

上接字	L	T	なし	K	R	不明			
	60 (52)	23 (19)	25 (22)	2*	1	7	*うち1例はHと併記		
下接字	L	T	なし	付属語	サ変	H	K	R	不明
	4	3	82 (72)	18	7	1	1	1	1

※入声軽 (K) 点

上接字	L	T	なし	R	H	F	不明
	13 (11)	2	5	2	3	1	2

下接字	L	P	なし	助詞 (ヲ)	F	H	不明
	1	1	21 (19)	1	2	1*	1 * P と併記

まずは、例数のおおい平声軽からみる。このように、F声点の分布をみると、上接字はL・T・なしが大部分をしめ、下接字は、なし・付属語(助詞ヲ・ニ・ハ、助動詞ナリ)・サ変動詞が大部分をしめるのである。

ただし、このような分布のかたよりが偶然の産物であって、F声点の大部分が漢音の声調を表示しているという可能性も否定できない。こころみに上接字がL・TでかつF声点のさされた字について中古音の四声と比較してみるとつぎのようになる。平声のみは声母の清濁でさらに二分した(注8)。

※上声：17

02A01：揆／02A02：限H／05B07：者／04A03：近(去)／06A03：捨／06A07：果H／06A07：体H／09B04：倒H(去)／11A01：死／11B05：可H／15A02：里H／18A02：忍／18A04：境／19A03：動／22A01：眼H／22B01：処H(去)／22B02：影H

※去声：22

01B03：勢／01B06：智R／02A04：性R／02A06：證／02B02：破R／02B07：歩R／03A03：度／03A05：会R／04A03：化／04B02：記R／05B06：次R／06B03：致R／07A04：至R／08B06：大R／11B05：秘／17A01：切／17B07：竟／18A03：義R／19B05：詔／22B08：印／24B02：数R(上)／24B03：利H

※平声：24 (清10濁14)

清 01A06：深F／01B03：身／04B04：詮／05A02：知F／10B04：清F／11B01：推F／12B01：揮／15A08：教L／19B05：間F／21B06：要

濁 01A03：降L／01A04：論L／02A03：錢L／03B02：寮／05B06：臣／16B07：累／16A07：情／17B05：流／18A02：源L／19A07：蹄／21B07：同／22B07：便／23B07：能／24B03：純

さらに、上接字なし、すなわち語頭にある F 声点のさされた字について同様の比較をおこなうと、つぎのような結果となる。

※上声：2

04A01：本／10A07：往

※去声：9

03B01：対 R／05B07：用／10A06：用／10B06：際／14B08：事 R／18A03：霧 R／18B04：案／18B07：例／19A04：自 R

※平声：10（清6濁4）

清 01B06：詮／02A02：鐘 F／03A07：分 F／18B05：湛 H／18B05：端 F／20A06：温 F
濁 16A02：難／19A01：長 L／19B04：同／23A04：荷

以上の結果から、F 声点のうち、漢音の声調がそのまま混入した可能性のあるものは、少数（上接字が L・T のもので 10/63、上接字なしで 6/21）であることがわかる。もちろん子細に観察すると、「19B05：人間<IF>シンカン」「19B04：同日<Ft>トウシツ」のように、音形から漢音であると推定できるものもあるが、逆に「04A03：適化<TF>チャツケ」「04A03：習近<pf>シフコン」「03A05：符会<LF>フェセリ」と呉音形の例も存在するのである。また、K 声点の例であるが、「08B04：不足言<HKl>ケン・仏子間会時仰ラル、玄-漢音也」と、漢音であることをわざわざ注記した例も存し、やはり原則として呉音でよまれることが意識されているようである。結局、これら F 声点の例の多数が漢音であるとはいえないのではなかろうか。

となると、このように遍在していることに意味があるのだとかがえてみたい。そこで、こうした分布のかたよりの意味を考察するてがかりとして、本資料の注記に注目することにしよう。まず、注記において F 声点が出てくる例には以下のようなものがある。

01B04：絶離<tL>依處ニ離 F トカ、ルニヨム也／02A01：二智<LL>依 v 處智 F カル也／
04B04：雜乱<pH>輕雜乱 F・カルニ／20A02：順曉<1H>カル・玄義曉 F ト云フ人モ有

これらは、「離」「乱」といった字の声点が、L 対 F、H 対 F というように 2 種類ありうることを注記している。ここで、04B04 と 20A02 の 2 例以外は、いずれも L 声点や T 声点といった、低平調の声点のさされた字が上接している。そして、「依處」という表現からみて、講者の相違による異説の存在などではなく、その字（又は語句）の出現する環境による交替現象について言及していることがわかる。このような例からも、上接字がこうした環境にあるときに L 声点と交替した F 声点が、先掲の表の分布に反映しているのではないかという仮説がたてられる。

つぎに、F 声点はでてこないが、この問題と関連がありそうな注記をあげる。

02B05：自由< IL >依處カルニヨム・玄同／03B01：一点< XL >転・軽重依處也／04A02：契当< LL >依所当ヲカルニヨム也／06B05：左様< LL >依處様ハカルニヨム也／21B08：例難< LL >軽重依處

以上のような例では、注記においてもF声点が出現するわけではない。しかし、04A02や06B05の例では語末の「当」や「様」を「カルニヨム」と表現しており、ここには、F声点をさすのとおなじ注記意図がはたらいている。「01B07：義相< IL >依處ニ相Lト重ク□□也」のような例は逆に、注記に「重ク」とある点からみて、< IF >とあるべきものの誤点であろう。実際、「02A03：五銭< lf >玄同・依所銭f重クヨム也」のように、掲出形においてはF声点をさしながら、それが「依所」「重クヨム」こともあるということを示した例もある。

さて、ここにみられる「依處(所)」「トコロニヨッテ」という注記は、具体的にはどのように解釈することができるであろうか。ひとつの可能性として、《当該字そのものについて、その字が語彙的にどういう環境にあるかによって声点が相違する》という意味に解釈する余地もありそうである。実際、F声点でもL声点でも出現する字はいくつかある(注9)。

しかしここでは、つぎのような例の存在を重視して、別の解釈をとりたい。

22B02：浅影重テ< LFXX >／22B03：浅影ノ上< LLXX >

この22B02の例のごとく、「浅影」とつぎの語とのあいだにきれめが存するときには、語末の「影」にF声点がさされ、22B03のように、「浅影」が助詞「ノ」を介して「上」という語と結合しているときには、「影」にL声点がさされているのである。助詞「ノ」が下接するばあいに全体が低平調表記になった例はほかにも以下のようなものがある。ここで注目されるのは、上接字がL声点やT声点であっても、助詞「ノ」が下接したばあいは、当該字にF声点やK声点がさされた例がないという点である。

14B06：世智弁聰ノ難< LLIXF >／16A04：浅行ノ菩薩< LIHX >／19A04：穢土ノ草庵< LIXHX >／19A04：布教ノ利益< LLXXX >／19B05：貞元ノ録< LIXK >／19A07：湿化ノ四生< TLXLR >／22A01：大幻ノ謗< IIXX >／22B07：浅智ノ短便< LLXLF >／22B08：宋訳ノ法護< LTXPI >

「依處」という注記も、こうした例を念頭においているのではなかろうか。これに関連して、つぎのような例がある。

06A06：直往< tL >連読ニテ如此也

06A06：迂廻< LL >ウエ・玄同連読ニテ如此ヨム也

ここでは、「依處」F声点となるという注記とは逆に、なぜこれらの語はF声点とはならないのかを説明している。こうした例に見える「連読」という注記は、《これらの語の語末に出ているL声点のさされた字がF声点となりうる環境にあるけれども、実際に論義において使用される文脈では、そこにきれめが存在せずにつぎの語句と結合してあらわれるために、語末の部分がL声点となっていない》ことを表現しているのではなかろうか。

また、つぎの例にみえる「不交替」という語もこうした点に関する注であろう。

08B05：六大普遍< TILL >玄同・不交替也

08B06：普遍ノ六大< LLXTf >カル

ここでは、「六大」「普遍」という語が順序をかえてあらわれる。まず「六大」に着目すると、08B05では< Tl >となってるが08B06では< Tf >と、語末におけるL声点とF声点との交替がおこっている。一方、「普遍」の方は、08B06では助詞「ノ」を介して「六大」と結合しているため「遍」の部分はL声点である。これに対して08B05では下接する要素がないため、「遍」の声点はFでもありうる。しかし伝承においてはL声点のままだということで、「不交替」という注記が付されたと解釈できるのではなかろうか。

きれめが存在せずにつぎの語と結合するという点では、つぎのように「ノ」を介さない、複合語の前項となったようなものも同様の条件をみたしているといえる。ここでも、「五利」「五純」が単独のばあいと複合語前項となったばあいとでF声点とL声点との交替がおこっているのである。

24B03：五利< IF >カル／24B03：五利五純< ILIf >カル

24B03：五純< IF >カル／24B03：五純五利< IIIF >カル

そうした点からすると、「10B04：住夜以清< ILLf >カル」といった例の「夜」の部分がL声点字に下接するのにF声点でないことも、「住夜」＋「以清」という複合の前項となっていることから説明がつくのではないかとおもわれる。これには、「11B03：下智声聞< IFXX >カル」のような例外があるが、後項の「声聞」に声点がさされていないことが、この部分の境界をより意識した注記であることの証左であり、複合語全体の音調を部分的に表示したものではないため、前項の独立した音調としてF声点がさされているのであろう。

こうした点からみて、「依處カルニヨム」などの表現が意図しているのは、いずれも語末のL声点のさされた字について、《その字をふくむ語全体が論義の読誦において、前後の語とどういう結合をするのか》という環境によってF声点ともなりうることの注記—すなわち、文字単位でなく語単位での交替を指示したもの—であるとみたいのである。

ではつぎに問題となるのは、こうした分布のかたよりが論義資料の声調表示の方式のなかでどんな位置づけをあたえられうるものなのかということである。結論からいえば、このF声点の表記は出合と関係するとみることが可能なのではなかろうか。

以前、『補忘記』に代表される論義資料における出合の記述が、日本漢字音における入声の開音節化について、その時期を知る傍証となるのではないかと論じたことがあるが、このとき前提となっていたのは、《論義の伝承における出合の記述は、中世に生じたとかんがえられるアクセント体系の変化を反映したものだ》ということであった。

しかし、『補忘記』の出合の記述のなかには、和語のアクセント変化とそのままには対応しないようなものも存するのであった。それは、平声（入声）＋平声（入声）といったように、漢字の声点のくみあわせが低平調となるばあいにおける譜記の問題である。

